

旧街道石畳、甘酒茶屋

江戸時代（1603年-1867年）に江戸（現在の東京）から京都へ向かう誰にとっても、東海道を行く長旅の最も油断できなかつた部分は、箱根の山を越えることでした。日本を統治していた侍が率いる徳川幕府は、箱根の山々の上を通る2都市を結ぶ街道を整備し、旅行者が厳重な検査を受けなければならない関所を設けました。箱根関所は江戸を出入りする人と武器の流れを規制しました。

江戸時代には、この街道に行く往来のほぼ全てが徒歩で、沿岸部から急勾配の丘を登った後は、まだ関所までは少し距離があり、多くの旅行者は疲れ果てていました。しかしこれがビジネスチャンスを生み、1619年の箱根関所設置後の数年間に、箱根の宿場町と畑宿の間から西にかけての大井平地区に4件のお茶屋ができました。お茶や甘酒（甘い発酵したお米の飲み物）、軽食を販売する以外にも、お茶屋は飛脚の起点や馬小屋にもなり、旅行者にサービスを提供していました。

甘酒茶屋

以後、他のお茶屋は、主に19世紀末に現在の国道1号線が開通したことで東海道沿いの交通量が劇的に減少したことにより、長く閉鎖してきましたが、甘

酒茶屋は現在でも営業しています。元々街道の反対側に位置していた茅葺屋根の建物は、古い資材を用いて 2009 年に再建され、侍の時代の生活を垣間見ることができます。囲炉裏の側に座れば、江戸時代の旅人のように甘酒を楽しむ、天井から吊り下げられている江戸時代の旅の工芸品を鑑賞し、この場所でどんな会話が繰り広げられたか思いを馳せることができます。

古い石畳の道

畑宿の方向の甘酒茶屋の裏側には、昔の東海道が広がっているのを目にすることができますでしょう。徳川幕府が 1680 年に石で舗装するまで、ここは土の道で、箱根の湿気の多い気候では泥でぬかるんでしまうことがしばしばありました。このことを考慮すれば、石を並べるのは、今日でも残る 340 年前の道の丈夫なパーツが証明するように、丁寧に行われた大事業でした。